

越後におけるツバキの古い記録

横山 健三

越後の山野に自生するツバキはユキツバキであるが、最初にその名で呼ばれたか記録に残る古い文献はないが、ツバキに関する古い記録には、ユキツバキの形態的な特徴を記載したと見られるものがある。

● 江戸時代(宝暦時代)の『越後名寄』[丸山元純著 全三十一巻、宝暦6年(1876)完成]

本書の出典は今泉省三・真水淳編『越佐叢書』第16巻(昭和53年)による。

海石榴(ツバキ・ツバキ)に関する記載

○自生種：「端山・深山皆生。その樹数尺ナラズ。皮薄ク、白シ。葉深青。長サ三寸余、幅二寸六、七分。二月、五出ノ単紅花ヲ開。其自生(ヒトリ)セル中ニモ色ノ濃キ、浅キ、早咲・遅開皆小木ナリ。三島郡田頭山・年友山、蒲原郡国上山・峯山ノ当リハ、与処(ヨソ)外ヨリ生長シ、丈余数尺ノ者有。」

深山のツバキは「樹が低木で大きくならない」と記し、ユキツバキの特徴を認識して解説しているとみられる。事実、越後の内陸部に分布するのはユキツバキであり、ヤブツバキは分布していない。三島郡・蒲原郡のものは樹の高さ数尺とあり、ヤブツバキ(或いはユキバタツバキ)に当たると思われる。現在でも三島郡・蒲原郡のツバキは、ヤブツバキ及びユキツバキとヤブツバキの特徴を兼ね備えた株、いわゆるユキバタツバキが自生し、大きな樹に生育している。以上のように県内のツバキには、二つの異なった形質をもつものが自生していることを記述している。つまり、ユキツバキの形態的特徴を、古い時代に認識していたとみられる。

○栽培種：「家屋ノ庭園ニ栽者単葉・重葉、白キ、紅キ、濃キ、薄キ、搾り、開分(サキワケ)等其品、不可尽。早開ニ二種、紅キハ昔ヨリ有之、白キハ近世間見ユル。」
農家の庭先に様々な色の株があることを示している。栽培されているツバキについても詳細に観察していることが伺える。

本書では自生種および栽培種の外にツバキに関する記述をしているので、全文を下記に引用する。

参考資料

『越佐叢書』(第十六巻・編者今泉省三・真水淳・昭和五十三年発行)
『越後名寄』(全三十一巻)(宝暦六年・一七五六年完成)

海石榴

端山・深山皆生。其樹数尺ナラズ。皮薄ク、白シ。葉深青、長サ三寸余、幅二寸六、七分。二月、五出ノ単紅花ヲ開。其自生セル中ニモ色ノ濃キ、浅キ、早咲・遅開皆小木ナリ。三島郡田頭山・年友山、蒲原郡国上山・峯山ノ当リハ、与処外ヨリ生長シ、丈余数尺ノ者有。家屋ノ庭園ニ栽者単葉・重葉、白キ、紅キ、濃キ、薄キ、搾り、開分等其品、数(不可)尽。早開ニ二種有、紅キハ昔ヨリ有之、白キハ近世間見ユル。移シ栽ル事五月中旬好ト云リ。枝ヲ挿事五、六月佳、春モ良。枝ノソキロヲ少シワリテ、赤土ノ泥ニ包ミ、雞卵ヨリ大ニ丸シ、土ニ植テ佳、挾ムハアシ、亦、当国ノ俗ニ、毎六月十八日ヲ用テ挿ハ能活生スト云リ。実ノ油無毒、諸品物ヲ煎シ食テ味カロク好。婦人ノ髪ノ脂ニ研リ末シテ摻之、本草ニ出タリ。

烏丸光広卿ノ百椿図序ニ、此比世ニモテハヤシ品多クイテキタル事見ヘタリ。光広卿ハ慶長ノ時代ナルヘシ。寛永ノ初ヨリヤウヤク数多ク出来シニヤ。

万葉集・本朝式倭名抄皆用テ椿ト与ニ海石榴、訓ニ豆波木、其来ルコト尚シ矣。単弁ノ赤キ者ヲ名山椿、此レ乃本源也。椿ハ本喬木之類、樽椿也。与ニ海石榴、迥ニ異也。椿ハ、寛文中、從唐渡ル香椿也。日本ノ古書ニツバキヲ海石榴ト書シモ有。

本草ニ、山茶ニ海榴茶・石榴茶有、是ツバキノ品類也。酉陽雜俎続集ニ曰、山茶ハ似ニ海石榴。然レハ別種也。
白玉ノ重葉 敦賀 搾白ニ紅ノ筋有、但、鹿村 赤キ單ニ
酒天童子 千葉 江戸水引 赤キ千葉ニ 白キ斑アリ 菊トヂ 重ナリ 景清 淡紅

